

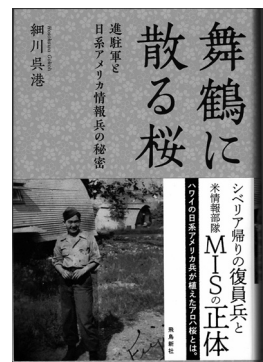
自著紹介

『舞鶴に散る桜』

—進駐軍と日系アメリカ情報兵の秘密—

飛鳥新社（1818円＋税）

細川呉港（会員）



焼け跡で、多くの日本人が家もなく、食べる物も不自由していたとき、舞鶴の丘の上にたくさん桜の苗木を植えたのは誰か？ 43年間名乗り出なかったハワイ出身の日系2世のアメリカ兵とは——。

ハワイのサトウキビ農場で育った移民の子、フジオ高木は、15歳のとき、親は下の5人の子どもを連れて日本の岩国に帰ってしまいました。昭和8年でした。ひとり残されたフジオは高校を出て、白人の家のハウスポーイをしながら、機械工となり真珠湾の珊瑚の海を掘る浚渫船の乗組員として働きます。

そして、運命の昭和16年12月7日、中湾で作業中に日本の奇襲攻撃が始まるのです。さらに近くに日本軍の攻撃機が不時着

フジオは上官のアメリカ兵とボートに乗って助けに行きますが、目の前で若いパイロットは自決してしまいました。持ち帰ったのはジャケットのみ。

そのジャケットの胸に日本語で書かれた名札を、船の仲間から「お前は日本人だから日本語が読めるだろう」と読むようにうながされます。しかし彼は答えられませんでした。名前は朝日長章。そのため彼は、白人の仲間からのしられ、また首を絞められて殺されそうになりました。みんな大爆撃を前に、気がたつていました。そしてかろうじて船を降ろされ、追放されてしまいます。その日からハワイの日系人は、窮地に立たされるのです。多くの日本人のリーダーが、収容所に収

監されました。一時は、日本人だということだけでいつ殺されるかもしれない状態に。日本人の中には洞窟に隠れた人もいました——。

その後フジオはアメリカ軍に応募。4回目にしてやっと採用され、アメリカ本土で日本語の特訓と、情報部隊として訓練を受け、 Guam 島に配属。日本軍の暗号の解読や捕虜の日記や、記録の翻訳。戦闘が終わりに近づくと、島の洞窟にいた日本兵に投降を呼びかけます。太平洋戦争を通して、日本語のわかる日系の情報部隊がどのようにアメリカ軍に貢献したか、今までほとんど語られていませんでした。このたびその一部が明らかになります。

情報部隊MISとはちょうど日本軍の特務機関に当たります。全部で6千人以上いたと言われ

ています（他の言語部隊も含む）。マッカーサーの日本上陸前に、フジオは厚木基地に降りたちます。その後広島や日本各地を視察し最初は岡山に駐屯。私服を着て民情を調査します。それが情報部隊の役目でした。やがて、舞鶴に。舞鶴には言わずと知れた、シベリアから多くの復員兵が帰ってきます。その中に、ソ連の収容所で共産党の洗礼を受けて、特別な任務を受けて日本に帰り、アメリカ軍の基地の調査や、あるいは鉄道爆破や騒乱を起こそうとする者、また過激な労働運動に走る人間はいないか、を調べるわけです。もう1つのグループは、ソ連の内情の聞き取りをしました。すでにソ連は、スターリンによる粛清だけでなく、国境に鉄のカーテンを張って内部で何が行われているか全くわからなくなっていました。同じ連合国であったにもかかわらず、冷戦はもう始まっていたのです。

このとき、MISが日本の復員兵から聞いた情報で、ソ連の

多くの町の詳細な地図ができたといえます。また彼らはソ連の水爆実験の有無も調べました。それらの情報の多くは、秘密にされ長いあいだ日系の兵士からは外部に語られませんでしたが、戦争後50年以上たち、少しずつ語られ始めたのです。復員兵からは、ソ連の収容所のように、強制労働させられた金山や、炭鉱や、レンガ工場で不思議な話もたくさんありました。今回それらのお話が初めて明らかにあります。

ある日、シベリアから帰って来る復員兵の中に、フジオの弟がいました。15歳のとき、ハवाईで別れた8歳の末の弟でした。奇跡ともいべき出会いでした。秀雄も15歳で、満蒙開拓義勇軍に入り、嫩江で終戦を迎え、シベリアに抑留されていたのです。弟は片目を失っていました。フジオは休暇をもらって、岩国の両親に会いに行きます。きちんと制服を着て、ジープで乗り付けるのです。岩国の郊外の農家でした。空襲からは免れて

いましたが、終戦直後の枕崎台風で家は壊れていました。十数年ぶりの対面です。大きくなったフジオに両親も喜びます。

フジオは貯金通帳を出し、両親に渡そうとします。何しろハワイの日本人はお金を溜めることが運命づけられているのですから、フジオも機械工として一生懸命お金を溜めていたのです。「このお金で家を直して」と。

しかし母親は拒否します。「いくら息子の溜めた金だからと言っても、アメリカ軍の金は受け取れん」と。それには深いわけがあったのですが、フジオはとても悲しみました。15歳からひとりですとウキ畑の中で育ったものですから――。お金を出して、両親に喜んでもらいたかったのです。肉親の愛に飢えていたのかもしれない。「フジオ、お前、進駐軍だからと言って威張るんじゃないよ。日本人につらく当たったら承知しないよ。そんな金があるんだら、困っている日本人みんなのために使え」と母親は追い打

ちをかけるように言いました。朝鮮戦争が始まろうとしていました。舞鶴に帰ったフジオは今、何をしたら日本人のためになるか考えました。焼け跡で、人々は苦しんでいました。日本人の子供たちが、ぼろを着て、何時も進駐軍の兵隊に群がってきます。チョコレートをくれ、チューインガムをくれと。そういう姿を見るのは日本人の血が流れているフジオにはとてもつらいことでした。

フジオは、仲良くなった舞鶴造船の役員、迫水周吉と相談して、桜の苗木をたくさん買い、舞鶴の港の見える丘に桜を植えることにしました。今、日本人のためには食料の方がいいのではないかと、言うものもいましたが、フジオは桜を選んだのです。終戦から20年たち、30年たつて、舞鶴の丘の上で、桜は大きくなり、舞鶴の人たちは花見に押し寄せるようになりました。その頃になって、初めて、「この桜を植えた人は誰だ」ということになったのです。舞鶴市は

市を上げて桜を寄付をした人を探し始めました。

その桜を植えた人探しは、この本の主たるテーマです。フジオが育ったハワイのサトウキビ畑から、太平洋戦争、そして終戦から占領軍の上陸。焼け跡、闇市、そして進駐軍と日本の女性たち――。やがて、時代は移り、ハワイには、日本人はサトウキビ刈りには行かなくて、多くの観光客が「お金を持って」観光やレジャーで行くようになります。いまではかつてのサトウキビ畑のプランテーションは1つもありません。戦中から戦後、フジオ高木の生きた時代を、彼の体験をたどりながら語ります。

これには今までほとんど語られることのなかった日系アメリカ兵から見た太平洋戦争と、終戦後のシンチューグンの時代の日本人女性とアメリカ兵の関係が具体的に書かれています。興安丸の写真や、引揚記念館の舞鶴港の栈橋の模型図なども掲載。